

学位論文審査の結果の要旨

令和元年12月4日

審査委員	主査	平尾 智広		
	副主査	(印) 田 宏基		
	副主査	祖江 理		
願出者	専攻	医学	部門	(平成27年度以前入学者のみ記入)
	学籍番号	16D726	氏名	菱井 修平
論文題目	Relationship between Sedentary Behavior and All-cause Mortality in Japanese Chronic Hemodialysis Patients: A Prospective Cohort Study			
学位論文の審査結果	<input checked="" type="radio"/> 合格	・	<input type="radio"/> 不合格	(該当するものを○で囲むこと。)
<p>〔 要 旨 〕</p> <p>【はじめに】 わが国における透析患者数は、年々増加しており、生活の質および生存率の改善が重要課題である。近年、「臥位または座位における1.5メッツ以下のすべての覚醒行動」と定義される座位行動が、総死亡と関与することが報告されている。本研究の目的は、慢性血液透析患者における座位行動と生命予後との関連性について検討することである。</p> <p>【対象】 2013年9月から2018年9月の間にA病院の全慢性血液透析患者183名のうち、研究参加の同意および座位行動の評価が可能であった71名(平均年齢72.1±11.7歳)を解析対象とした。</p> <p>【方法】 座位行動の多寡は、中央値を基準として二分位(短座位群と長座位群)に分類し、カプランマイヤー法により生存曲線を作成し、ログランク検定を用いて二群比較を行った。また、コックス比例ハザード解析を用いて、性別、年齢、透析歴、アルブミン、糖尿病既往歴をそれぞれ交絡因子として、座位行動と死亡との関連を検討した。</p> <p>【結果】 全日(ハザード比 2.83, p=0.028)、透析日(ハザード比 2.98, p=0.016)、非透析日(ハザード比 2.79, p=0.024)において、短座位群が長座位群よりも有意に高い生存率であった。また、コックス比例ハザードモデルでは、透析日の性別、年齢での調整以外、全日、非透析日では、それぞれすべての項目で調整後も座位行動が死亡に対する有意な規定因子であった。</p>				

【考察】

本研究は、日本人慢性血液透析患者を対象に、座位行動と死亡との関連について検討した初めての研究である。慢性血液透析患者は、高齢・低身体活動量・低体力であるため、身体活動量の増加よりも、座位行動の改善が実行可能な提案であると考えられる。

【まとめ】

慢性血液透析患者において、座位行動の多寡が生命予後に影響を及ぼす可能性が示唆された。

本研究に関する学位論文審査は、令和元年12月4日に行われた。

本研究は、邦人慢性血液透析患者を対象とした座位行動と生命予後との関連を初めて検討したもので、座位行動が慢性血液透析患者の生命予後に影響を及ぼす要因である可能性を指摘した。結果に対する十分な考察もなされており、本研究で得られた成果は、慢性血液透析患者の生活習慣改善の一助になる可能性を示した点で意義があり、学術的価値も高い。委員会の合議により、本論文は博士（医学）の学位論文として十分に値するものと判定した。

審査においては、

- 1) 対象者の背景因子について検討は行ったのか。
- 2) ベースライン時での性差に影響はあるのか。
- 3) 生存分析の結果をどう解釈するのか。
- 4) 除外データによるバイアスはないのか。
- 5) なぜ中央値で2分位して検討したのか。
- 6) 透析日と非透析日を分けて検討する必要性は。
- 7) 座位行動とは、どのようなものか。
- 8) 透析日と非透析日の座位行動に差がなかった理由は。
- 9) 高齢者が座位行動を減らすためにはどのようなことを提案できるのか。
- 10) 運動介入が進んでいない背景は何か。

など多数の質問が行われた。

申請者は、いずれにも明確に応答した。

最後に、主査より、対象者の身体機能などの客観的な評価も加味して検討する必要がある等の助言があった。以上のことから、医学博士の学位授与に値する十分な見識と能力を有することが認められた。

掲 載 誌 名	Acta Medica Okayama	第 73 卷, 第 5 号
(公表予定) 掲 載 年 月	2019 年 10 月	出版社 (等) 名 Okayama University Medical School Okayama, Japan

(備考) 要旨は、1, 500字以内にまとめてください。